

# 漱石に関する一考察(1)

高木, 利夫

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

109

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

109

(発行年 / Year)

1999-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004635>

## 漱石に関する一考察〔I〕

高 木 利 夫

### 一、財産及び金銭をめぐる表現について

夏目漱石の作品には財産をめぐるトラブルや、あるいはトラブルにまで発展しなくても金銭が人間関係に微妙な陰を投げかける場面が数多く出て来て、ストーリーの展開に重要な役割を果している。資本主義社会に生きている人間を描く以上、金銭は現実を反映する要であるから当然と言えば当然なのだが、しかし漱石は、何故あれ程までに財産や金銭にこだわらなければならなかったのか。日本近代文学史の上では、推理小説や探偵小説の類は別として、珍しいケースなのであり、漱石文学の普遍性はそれによって保証されている面がある。

日本の近代文学では少数の例として、尾崎紅葉の『金色夜叉』や有島武郎『宣言一つ』を思い浮べることが出来るが、後者は自分の財産を放棄し、農場を解放する決意の思想的根拠を示した論文であって、小説ではない。他には株式市場内部を描いた野間宏の『さいころの空』や、銀行などの企業内部を題材にした山田智彦等の作品があるが、ともに組織や人間をテーマにした小説である。漱石の場合には組織という概念はいまだ意識されていない。むしろ個人を主にした人間関係に関心はしられている。

それより問題なのは、大正時代に全盛をきわめた私小説の貧乏話のほうである。その代表格は葛西善蔵である

が、伊藤整の定義したいわゆる「逃亡奴隷」の文学であって、作法が漱石とはまったく異なる。貧乏生活の体験的表現が主であって、貧しさが極限であればある程、厳しく文学修業に打ち込む作者の姿勢の現われとして高く評価されたのである。金銭を侮蔑し、普通の社会生活の枠外で生きていく覚悟が前提となっており、作品の出来のよしあしよりも、描かれている作者の生活の内実のほうが重要視されている。当時、文壇の主流であった自然主義系の作家たちから「余裕派」として貶められた漱石にしても、そう恵まれた生活環境にあったわけではないが、ただ貧乏体験を直接的に表現する作法はとらなかった。『道草』にしても自伝的小説とは言われるが、私小説とは言われない。貧乏のもたらす精神の歪みを何人かの登場人物によって表現し、作品の底を深くすることに成功しているが、基本的には虚構フィクションによって金銭が明治の社会でどのような作用をし、人間関係にどう働きかけているかを真正面から捉え、論理的に考えようとしているのである。

財産及び金銭をめぐる漱石の表現はかなり頻度も多く、しかも多様である。そこで便宜的にその表現を三つに分類して、順次、考察を進めていくことにする。

# 1. 財産をめぐるトラブル及び金銭観

財産をめぐるトラブルによって人間不信に陥ってしまった人物が登場し、テーマに関係のある重要な出来事としてトラブルが描かれている作品は『門』『こころ』『虞美人草』の三つである。『吾輩は猫である』にも関係のある表現が見られる。

漱石に財産問題にこだわる体験的必然性があつたとは考えられない。実家の夏目家は江戸草分名主であり、維新前は経済的にも恵まれていたことは、例えば『硝子戸の中』で、「そんな派出はでな暮しをした昔もあつたのか」と夢のような心持になった、と書いている姉たちの芝居見物の様子からも窺える。夜半に起き出して、あつらえておいた屋根船に乗り、隅田川を逆上つて猿若町の芝居小屋まで行き、一日遊んで夜半に帰ってくる。しかし、資産家と呼ばれるほどではなかったろうし、維新後は父が事業に手を出して失敗したために落魄し、明治十四、五年頃には

住み馴れた牛込馬場下の住居を引き払って神楽坂の借家に移ったといわれる。<sup>(1)</sup>家督を相続してくれという父の依頼を断った漱石が、家督を継いだすぐ上の兄と財産分けをめぐって争ったという事実も伝わっていない。それほど財産は残っていないのであろう。とすれば、財産をめぐるトラブルは純粹に創作上の必然性であったということになる。

『門』では、はじめした崖下の借家に住む下級官吏宗助お米夫婦の悩みが、弟小六の学費問題であることが冒頭から示されている。高校生の小六の学費は叔父の佐伯から出たのだが、一年前に叔父が急死したのもう面倒は見られない、と通告を受けていたのである。「手紙ちゃ駄目よ、行つて能く話をして来なくっちゃ」とお米に注意され、小六にも「行つて呉れたんですかね」と催促されているのに、宗助は億劫がつて訪ねて行こうとしない。小説の前半はその原因となっているトラブルの経緯と、交渉の経過を描くことに大半が費やされているのである。

宗助の家は「抱車夫を邸内の長屋に住まはして、楽に暮してゐ」たのだが、父が死んだ時、あると思つた財産が案外に少なく、ないつもりでの借金がいふあつた。叔父の佐伯に相談したところ、屋敷を売つたらよいだろうという答えであつた。叔父は事業家で、いろいろな事に手を出しては失敗する山氣の多い男である。しかし、宗助夫婦は当時、「突然不用意の二人を吹き倒した大風」のために広島で暮らしていたので、叔父に一時の工面を頼んで当座の片をつけてもらい、小六は叔父の家に引き取つて世話をしてもらうことにした。「宗助は自分の家屋敷の売却方に就て、一切の事を叔父に一任して仕舞つた。早く云ふと、急場の金策に対する報酬として土地家屋を提供した様なものである」

とある。手元に残つた金は約二千元。その半分の千円を小六の学費として叔父に預けて宗助夫婦は広島に戻つた。

その後、家が売れたから安心しろ、という手紙が来たが、いくらに売れたとは書いてなかったし、問い合わせにも明確な返事はなかった。不満ではあつたが、「單なる無心は自分の過去に対しても言ひ出せるものではない」と

考えてそのまま放っておいたし、東京へ戻ってからでも面倒になつて言い出せないうちに叔父が急死した。

叔母を訪ねると、宗助の屋敷を売り払つた時、急場に間に合わせた借財を返した上になお四千五百円とか四千三百円とかが余つたが、叔父はあの屋敷は宗助が自分に提供していったものだから自分の所得である、と言つたという。しかし、儲けたと非難されるのは心持が悪いから、小六の名義で保管しておいて小六の財産にしてやる、としながらも、その財産で神田の表通りの家屋を買つてしまい、それもまだ保険を掛けないうちに火事で焼けてしまつたというのである。

「運だと思つてあきらめてください」  
と叔母は言つた。

預けておいた千円も小六が使つてしまつたということで、結局、宗助の手もとに戻つたのは抱一の屏風一つであつた。小六は下宿を引き払つて宗助の家に來ることになり、やがて家主の坂井家に書生として住み込むことになつて、不足は宗助と佐伯とで分担することで学費問題は解決を見るのである。

肉親、親戚関係が濃密であつた明治時代、叔父・甥の間柄で正式に文書を取り交すのはむづかしい、口に出すこととさへ憚られることだったかも知れないが、それにしてもすべてを口約束ですませ、権利書や実印を渡したのは迂闊な行爲である。宗助は法律に訴えることも考える。が、証拠がないとして諦めるしかなかった。彼は初めから叔父を信用していたわけではない。叔父には信用がないから何を言つても無駄だと嘆くお米に、こつちだつて信用していない、と答える場面がある。相互に不信感を持つていることを示しているのであるが、それなのに何故、白紙委任をしてしまつたのか。

夫婦の間には「未来とか希望と云ふものの影は殆んど射さない様に見えた」と書いてある。だから、仕方がない、我慢するしかない、と話し合つたりするのである。「自業自得で、未来を塗抹した」夫婦なのである。そういう消極的な姿勢が叔父に対しても強く出ることをためらわせ、叔父もそれをよいことに「宗助はあんな事をして廃嫡に迄されかかつた奴だから、一文だつて取る権利はない」とまで口に出すことになるのである。叔父は世間

の道德的難題を盾にして宗助の財産を奪ったことになる。これは許されることなのか。

人にすまないことをした宗助夫婦は、新しいオーバーを買うのも諦め、靴一足買うのにも臨時収入を待たなければならぬような経済的に追い詰められた境遇にいる。宗助にとつては友人であり、お米にとつては夫である安井を裏切つて結ばれた二人。漱石はやはりこの男女の恋愛における罪悪性を描きたかつたのであろうか。倫理的に罰せられるべき行為によつて逼塞せざるを得なくなつた男女のその後を描きたかつたのであろうか。ともに人間は変わり得る存在であることを示しているのではあるが、叔父の財産横領による人間不信の表現は、あくまでも恋愛の持つ罪悪性を補完する役割にとどまつているのであろうか。一見そう見えないこともないけれども、漱石の意図としては両者は同等の比重を持つていたに違ひない、と思われる。ともに自我が剥き出しになる場なのだから。

財産をめぐるトラブルによる人間不信感と、恋愛における倫理的な罪悪感、この二つのテーマは『こころ』でも繰り返され、より深刻な形で表現されている。

『こころ』は会話に意味を持たせた、哲學的ダイアログのような小説であるが、語り手の大学生「私」に鎌倉の海岸で知り合つた「先生」は時々、「恋は罪悪です。そして、神聖なものです」というようなせりふを吐く。ある日、二人で散歩していると、先生は突然、「君の家には財産が余程あるんですか」と訊いた。「山と田地が少しある限で、金なんか丸で無いんでせう」と答える私に、「君の御父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つて置くやうにしたら何うですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と忠告する。この時、先生は「是でも元は財産家なんだがなあ」と呟き、血のつづいた親戚の者から欺かれた、父の前では善人であつた彼らが、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わった、彼らを憎むばかりではない、彼らが代表している人間というもの一般に憎むことを覚えた、と言つた。「平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」「金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」

ふだんもの静かな先生にしては過激な発言である。漱石の金銭観が明確に出ている。

親戚の者から欺かれた、だまされたという先生の体験は「下 先生の遺書」の前半に具体的に描かれている。先生の故郷は新潟で、資産家の一人息子だが、二十歳になる前に両親が腸チフスに罹って相ついで死んでしまった。母は父の弟である叔父に万事を頼んで亡くなった。先生は高等学校に入学するために上京したが、学費のほか書籍費や臨時の出費は叔父に請求して送ってもらっていた。夏休みに帰国すると、先生の家には叔父夫婦が住んでおり、先生に結婚をすすめた。早く嫁を貰って、父のあとを相続しろというのである。先生は断った。ところが、翌年帰国すると再び結婚をすすめられ、それも相手は叔父の娘（従妹）だという。先生は再び断った。すると、三度目の帰国の時は一家の態度が変わっていた。先生が財産について聞くと、叔父がごまかしているのが分った。娘を押しつけようとしたのも策略だし、叔父が妾を持ち、一時失敗しかかっていた事業も、ここ二、三年来、盛り返してきたことも分った。他の親戚に間に入ってもらい、所有に関わる一切のものをまとめてもらったが、結果は予期した額よりもはるかに少なかった。先生はすべてを金の形に変えて、二度と再び故郷の土を踏まないつもりで東京に戻ってきたという。

叔父がどうごまかしたのか、そんなことが法律的に可能なのかどうか、具体的に書かれていないので検討のしようもないが、先生は訴訟するかどうか迷った末、長い時間がかかるのを恐れて諦めた、とある。しかし、受けた心の傷は深く、先生は人間全体を信用しない人間になってしまった。人間を嫌い、憎み、孤独と寂寥の中で自分を呪いながら生きている人間になってしまった。そう私に告げたのである。勿論、原因は財産をめぐるトラブルだけではなくであろう。遺書の後半には、下宿のお嬢さんをめぐって友人を裏切り、自殺に追い込んでしまった過去の体験が語られている。恋愛の倫理的な罪悪性を示すこのエピソードは大変な衝撃力を持っており、財産をめぐるエピソードのほうは陰に隠れてしまいがちだが、しかし漱石内部のバランスはどうであつたろうか。

『ころ』は予告によれば、数種の短編を書きついで総題を『心』とする予定だったという。一種の連鎖体小説で、『彼岸過迄』と同じ構想だったわけであるが、しかし予想通りに片がつかないことが分って、「先生の遺書」だけで連載を打ち切って、現在のように三部構成にして出版した作品である。当然、伏線のまま中途半端に放棄され

た部分もある。特に「私」の表現に問題が多い。現在の形では語り手としての役割が中心で、先生の内面を映す鏡のような存在に過ぎないのだが、それにしても「中 両親と私」が余りにも詳細に描かれ過ぎていて。メイン・ストーリーにとっては異質な要素が突出している印象を与えるのである。

実は漱石は「先生の遺書」に続く短編の主人公に私を据えて、父亡き後の財産分けをめぐるトラブルや結婚問題、先生の奥さんとの関係などを描くつもりだったのではないかと推測することも可能なのである。そう推測すると、先生の手紙を受け取った私が、死の床にいる父の最期を看取することもせずにすぐに汽車に飛び乗ってしまった、欠陥と見えるこの部分も、続きが出来て、ストーリーとして完結するのではないかと思われる。

「中 両親と私」の中で、私が兄に向って、「一体家の財産は何うなってるんだらう」と訊く場面がある。当然、私の意識の中には先生のアドバイスがある。兄は「おれは知らない」と答え、お前、ここへ帰って来て、うちの事を整理する気はないか、と訊く。私は兄が帰って来るのが順だと言い、兄はそんなことは出来ない、お前がいやなら、伯父さんに頼むんだが……と答える。この兄弟の会話を次の短編の伏線として考えることも出来よう。そうすると、伯父が重要な役割を果たすこともあり得る。それでは先生の場合と余りにも似てくるが、どちらにしろ私を主人公にした短編が作られれば、財産をめぐるトラブルは必要不可欠の要素になったに違いない。

『門』や『こころ』より以前に発表された『虞美人草』においても、財産をめぐるトラブルは主要なテーマになっている。義母との確執を避けるために甲野欽吾が財産を放棄する決心を固めるのであるが、それが妹藤尾の結婚問題と密接に関連して、ちょうど二つの糸がからみ合い、よじり合うようにして物語が進行し、大団円に至るのである。ただ、この段階ではまだ創作技法が未熟で、観念的であり過ぎたために、正宗白鳥などから勧善懲悪小説だと批判された作品だけに、漱石の思想はより明確に表現されている。

『門』や『こころ』の叔父に相当する悪役は義母である。義母は血のつながった藤尾が他家に嫁いだ時の、甲野家における自分の立場に不安を持ち、孤児である小野清三を婿に迎えようと策略をめぐらすのであるが、そのことを

察知した欽吾は義母に罪惡を犯させないため、自分から身を引いて財産を放棄し、家を藤尾に譲って「無一物」になろうとするのである。トラブルを未然に防ごうとする意思が示されている。漱石はこの欽吾の決意を通して、明治という新時代を支配する金銭の原理に対する違和感、というよりもっと強い否定的な感情、嫌惡感を表わそうとしたのであろう。財産が人間の道義心、倫理感を破壊する、その恐ろしさを表現しようとしたのであろう。「無一物から出直す」と親友の宗近一に告げた欽吾の言葉は、勿論、禪の思想にその根底がある。財産や金銭など何の価値もないという漱石の基本的な認識が示されている。

小説は小野清三が藤尾との結婚を拒否して小夜子と結婚することを告げ、藤尾が自殺し、義母が謝罪するという結末で幕を閉じる。欽吾の思想的勝利、道義的勝利を歌い上げる形になったわけで、そのために悪口を浴びる結果を招いたのであるが、しかし、この作品はそれほど単純ではない。作品の現実性は欽吾よりも義母と小野の人物像によって保持されているので、この悪役を振り当てられた二人がいなければ一挙に精彩を失って、底の浅い小説になつていただであらう。例えば、小野が欽吾の書齋を見て、うらやましがるところがある。こういう書齋に入りたいと彼は思う。自分は立派な頭脳を持っている。その頭脳を使って世間に貢献するのが天職である、天職を尽くすための条件の一つがこんな書齋だ、と。「自分は甲野さんより有益な材である。その有益な材を抱いて奔走に、六十円に、月々を衣食するに、甲野さんは、手を拱いて、徒然の日を退屈さうに暮らしてゐる。此書齋を甲野さんが占領するのは勿体ない」

若き日の漱石にもこんな感慨を抱いた時があつたに違いない。小野清三は漱石の現実的側面を託された人物なのである。対する甲野欽吾は漱石の理想的側面を託された人物であり、ともに分身なのである。両者の対比は即ち漱石内部の、現実と理想の対立を示すものである。どちらかと言えば、漱石の実像は小野に近かつたはずであるが、それでも彼は欽吾に軍配を上げた。

井上孤堂先生にしても、昔、面倒を見たのだから結婚するのが当然だと、威丈高に娘を小野に押しつけようとする。小野は別に約束したわけでもないのに、と悩むのだが、現在の常識からすれば、それを断るのがなぜ道義に反

するのか理解できないに違いない。それでも漱石は許せないと考えるのである。欽吾の代弁者である宗近が小野に向つて「救ひに来た」と告げ、小夜子との結婚を勧める場面がある。道徳的救済という意味であろうが、この言葉に新時代の利己主義<sup>ユゴイズム</sup>に対する否定的感情と、儒教や仏教によつて培われてきた旧時代の心性が明瞭に現われている。小野は新時代の風潮に毒されて墮落した人間として扱われているのである。世間体を気にする義母にしても、欽吾は許さない。傲慢と言われても仕方のないほどの苛烈な断罪である。

このような狭量ともとれる倫理観は発表当時の明治四十年の時点でも、現実離れた理想論という批判は当然あつたはずである。それでも漱石は藤尾を罰し、小野と義母とを謝罪させずにはいらなかった。それほど激しい反撥が彼の中にはあつたのであろう。競争原理によつて機能する社会、恋愛と金銭の場で自我<sup>エゴ</sup>が剥き出しになる現実に對する嫌悪感を抑えきれなかったのであろう。

金銭に対する嫌悪感は処女作『吾輩は猫である』でも明確に表現されている。筋らしい筋のないこの小説も、苦沙弥、迷亭、寒月などの太平の逸民と、実業家金田一家との交渉、対立が辛うじて軸となつて展開しているのであるが、中学の英語教師苦沙弥の実業家嫌いは徹底していて、「実業家に対する尊敬の度は極めて低い。実業家よりも中学校の先生の方がえらいと信じて居る」と記述されているし、美学者迷亭の質問に「実業家は嫌ひだ」とはつきり答える場面もある。しかし、平衡感覚<sup>バランス</sup>の豊かな漱石は対立する側の金田一家の様子も猫の眼を通して描いている。当然、金持が自慢の一家はろくに資産のない苦沙弥たちを軽蔑していて、「金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐変木だ」と抱えの車夫は罵るし、かつての苦沙弥の旧友鈴木は金田家に入入りして、「自分の働きのないのじゃ気が付かない」「丸で彼等の財産でも捲き上げた様な気分」でいるなどと言う。金田自身も生意気な連中をこらしめるためというので、落雲館中学の生徒にいやがらせをさせたりする。寒月と金田家の娘富子との縁談はそつちのけで両者の対立は深まるばかりなのである。

太平の逸民とは竹林の七賢人に代表される東洋的な隠者思想から発したものであろうが、時代の外に身を置き

て、鮮烈な批評精神を保持しつつける誇り高い連中を意味するのであろう。だが、彼らも自分たちが新時代を支配する金銭という力とは無縁な存在であることは自覚している。その上で金銭万能の風潮を侮蔑しているのである。一方、金田一家は明治新時代の担い手である新興階級であることに過大な自負心を抱いている。対立の根は深いのである。漱石はその対立の思想的根拠を逸民たちの会話を通して表現しようとしている。

「西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのぢやない。西洋と大に違ふ所は、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云ふ一大仮定の下に發達して居るのだ」

哲學者独仙は西洋と日本の文明を比較してこう言っている。苦沙弥もまた、二六時中キョトキョト、コンコンして一刻の安心も得ないのが今の人の心だ、として、

「寝てもおれ、覚めてもおれ、此おれが至る所につけまっはって居るから、人間の行為行動が人工的にコセつく許り、自分で窮屈になる許り、世の中が苦しくなる許り」

そう自己主義<sup>エゴイズム</sup>を批判している。独仙も苦沙弥とともに漱石の分身であつて、金銭に対する嫌悪感がこうした文明批評を根拠として生まれたものであることが分る。「永日小品」の「金」でも「金は摩物」という表現がある。

## 2. 日常生活における金銭をめぐる問題

日常生活において金銭は不可欠な要素であり、人間関係に微妙に関わってくるし、多くの悲喜劇を生む。煩わしいことではあるが、生きていく上で無視することは出来ない。漱石は様々な場面でこの金銭を使う。月給や家賃など、金額を明示する。読者はそれによって具体的に実態を理解したに違いない。金銭の貸借や仕送り、援助をめぐる混乱の場面も多く、そのため人間関係が変化し、ストーリー展開にも重要な影響を与える。日常の現実を描写する以上、当然とも言える作法なのだが、これが日本の近代文学では例外に属するのである。先にも述べたが、漱石文学の普遍性の根拠はここにもある。作品から具体例を引いて検討してみよう。

『坊っちゃん』では、教頭の赤シャツと画学の野だいこに釣りに誘われ、山嵐の堀田に対する悪口を吹き込まれた坊っちゃんが、翌日、「おれは君に氷水を著られる因縁がないから」と代金の一銭五厘を机の上に置く。その日から二人は口も利かなくなるのだが、一銭五厘はそのままほこりだらけになって机に乗っている。「二人の間の牆壁となつて」見るのが苦になった、と書いてある。金銭が人間関係の状況を表わす象徴となっている例である。しかし、次第に赤シャツの卑劣な言動が分つてきて、二人が口を利き合うようになった途端、坊っちゃんは「矢つ張奢つて貰ふ方がいい様だから、引き込ますんだ」と言つて、一銭五厘を自分のがま口に入れる。仲直り成立の儀式のような気配である。

この小説は、中学校内における赤シャツ派と山嵐派との一種の派閥抗争を軸として展開しているのであるが、新入教員坊っちゃんは二つの派閥の間を揺れ動きながら次第に現実を把握していつて、正義派の山嵐と組むことになる。一銭五厘は正義に目覚めた坊っちゃんの心の証なのかも知れない。しかし、構成はそれ程単純ではなく、赤シャツも坊っちゃんとともに漱石の分身である。文学士赤シャツは現実的側面を、正義漢坊っちゃんは理想的側面を代表している人物なので、両者の対立は即ち漱石内部の対立を意味しているのである。

氷水の代金のはかにも細かく見ていくと、金銭の額が随所に明示されている。下女の清が貸してくれた三円。父が亡くなった後、家を整理して兄がくれたのが六百元。それで三年間、物理学校へ通つて勉強した。赴任した松山中学校の月給が四十円。汽車賃三銭。宿屋に五円の茶代を払う。団子二皿七銭で生徒にからかわれる。赤シャツの家の家賃が九円五十銭。東京へ戻つて街鉄の技手になった時の月給が二十五円。家賃六円。発表当時、読者にははつきり実状が把握できたに違いない。

『虞美人草』でも結末になだれ込む大事な転換点で、借金が小道具として使われている。京都以来の旧友浅井が小野清三に「金を貸してくれ」と申し込んだ。小野はそれを好機として、十円を貸す代わりに自分では到底できない、それだけの度胸がない用事を押しつけるのである。旧師井上孤堂先生に小夜子との結婚を断るという使いである。長い間お世話になったお礼として物質的な補助をする、という付帯条件をつけて。当然、先生は怒り、小夜

子は泣く。

「井上孤堂は法律上の契約よりも道義上の契約を重んずる人間だ」「じかに来て断れと小野にいつてくれ」そう聞いた浅井は宗近一の家に相談に行き、事態は急展開するのである。浅井の軽薄さと、小野の性格的な弱さが浮き彫りになる場面である。社会生活の暗部と二人の男の人間の暗さが結びついて、一種の怖さを感じさせる。

漱石にはストーリーを展開する上で、人間関係を動かす手段として借金を使う作法上の習性があったようだ。

『三四郎』においても、主人公小川三四郎と里見美禰子との関係が借金を契機として深まる様子を描いている。三四郎は友人の佐々木与次郎に二十円の金を貸す。もともと二十円は広田先生が野々宮宗八から借りたもので、それを預った与次郎が勝手に馬券を買ってすってしまったのだ。月末、下宿代を支払う時になっても返さない上に、美禰子に借金を頼んだら「御用立て申します」という返事だったから取りに行ってくれ、と言うのである。与次郎には渡せない、直接小川さんにお手渡しします、と美禰子は言ったという。三四郎は彼女を訪ねる。「みんな、御遣ひなさい」と銀行でおろした三十円を彼女は渡す。このやりとりの間に二人の関係は明らかに一歩進むのである。

「君、あの女を愛してゐるんだらう」「何時迄も借りて置いてやれ」と、与次郎は言う。三四郎も美禰子に借金を返す時には「又一煽り来るに極つてゐる。成るべく大きく来れば好い」と思ふのである。金銭を有効な手段として彼女との仲を深めようと意識していたことになる。三四郎は国元の母親から特別に送ってもらった三十円を持って、美禰子がモデルになっている画家原口の家を訪ねる。「何うともして、二人の間に掛かった薄い幕の様なものを裂き破りたくなつた」三四郎は、「本当は金を返しに行つたのぢやありません」「あなたに会ひたいから行つたのです」と告げる。しかし、美禰子はかすかに溜息を洩しただけである。

美禰子はすでに兄の友人との結婚を決めていたのである。他の人からそれを聞いた三四郎は公堂に彼女を訪ねて行き、三十円を返す。借金を返した時が二人の別れの時だった。金を受け取った彼女は以前、三四郎に選んでもらった香水ヘリオトロープを染み込ませたハンカチを彼の顔の前にかざして、旧約聖書の詩句の一節を呟く。美禰

子は三四郎に対してどんな感情を持っていたのか、彼女の内面表現が少なく、暗示的で、分りにくいために、従来から様々な議論があるが、その蠱惑的な言動に揺れ動きながらも一途に迫ろうとする三四郎の思いは確実に伝わってくる。ちなみにこの作品が発表された明治四十一年当時の三千円は、田舎では四人家族が半年食っている額だと三四郎の母からの手紙に書いてあって、その説が妥当かどうかで野々宮兄妹との間で会話が弾む場面がある。かなりの高額に違いない。

『それから』においても、借金が代助と三千代との愛を確認し、深める媒介として重要な役割を果たしている。三千代と平岡の夫婦は銀行の京阪地方の支店勤めを辞めて、三年ぶりに東京へ戻ってきた。代助と平岡、三千代の兄菅沼は学生時代の友人で、親しく交際していたが、菅沼が腸チフスで死んだ後、平岡と三千代との間に立って二人の結婚をまとめたのが代助だったのである。しかし、代助は三千代に愛情を抱いていた。帰京後間もなく、まだ独身でいる代助を三千代が訪ねてきて、五百円の借金を申し込んだ。向うへ置き去りにしてきた借金が三口ある、そのうちの一口をぜひ片付けなくてはならないから、というのである。働くこともせず、実業家の父からの仕送りで生活している代助には余裕はない。そこで兄に事情を打ち明けて頼むが、取り合ってもらえず、仕方なく嫂に借金を申し込んだけれども断られた。しかし、数日して嫂から二百円の小切手が郵送されてきた。

その後の展開は、平岡夫婦の亀裂が深まっていくのと並行して、代助と三千代が借金の用事で相互に訪問する間に接近していく過程が描かれている。代助は二百円の小切手を彼女に渡す。だがそれは借金の返済には回らないで、なしくずしに生活費として使ってしまった、と三千代が詫言に来る。平岡は新聞社に勤め始めるが、生活費を家に入れない。次に三千代を訪ねた時、代助は紙入れの中にあるものを出して渡しなが、叱られるなら、黙ってゐたら可からう」と注意する。三千代もまた、夫には告げず、「淋しくって不<sup>いづ</sup>可<sup>い</sup>ないから、又来て頂戴」と代助に言う。

こうしている間に、代助は自然の命する通り、天意によって賽を投げるほかはないと決心を固めていくのである。

「僕の存在にあなたが必要だ」

と代助は八千代に告白する。八千代は泣き、「余りだわ」「残酷だわ」と言った後、

「仕様がな、覚悟を極めませう」

と答える。

「社会から逐ひ放たるべき一人の魂は、ただ二人対ひ合つて、互に穴の明く程眺めてゐた」

姦通罪の存在した時代である。苛酷な試験が二人の前には立ちはだかつている。父からの仕送りを絶たれた代助は、すぐにも仕事を探さなければならなくなる。

最後の作品『明暗』においても、新婚間もない会社員津田由雄は京都にいる父から毎月仕送りを受けていた。ところが、今月分を送つてくれない、それが若夫婦の目下の悩みであるという設定で小説が始まっている。父からは、今月はいつとも通り送金できないからそつちでどうにか都合しておけ、という手紙が来た。貸家が二軒空いてしまったためにその分だけ家賃が入って来ない、その上臨時の出費がかさんだので、というのが理由であつたが、しかし本当は、毎月の不足を補つて貰うことになつた条件として盆暮れの賞与から幾らか返済することになつていたのに、この夏その約束を履行しなかつた、それで父が感情を害したからであつた。津田は、どこの国におやじから送つて貰つた金をきちんきちんと返す奴があるか、と思つているし、妻のお延は、私達が知らない贅沢をしていると考えていらつしやるのだらう、と思つている。

この夫婦の仕送り問題や生活費をめぐる様々な意見が交錯し、夫婦二人に対する人格批判も出て、人間関係に軋みが生じる。津田の妹お秀は父の同情者である。兄夫婦を虚栄心が強く、身勝手だと思つており、嫂の指輪が贅沢に見えて、気になつて仕方がない。叔父の藤井夫婦も、津田は心が派手で、真面目さが足りない、と見ている。会社の上司吉川の夫人も「腹の中ではそれ程延子さんを大事にしてゐらつしやらないでせう」などと津田に訊く。お延はお延で「良人といふものは、たゞ妻の情愛を吸ひ込むためにのみ生存する海綿にすぎないのだらうか」と疑問を抱いている。

こうした各人が背中を向け合っているような関係の中で、痔の手術で入院している津田の病室でお秀とお延が顔を合わせ、金をめぐって三人の間で虚々実々の会話が展開するのである。前半の山場となっている場面である。初めは津田、お秀の兄妹がお秀の持参した小切手をめぐって口論する。父から毎月送金して貰う約束を取り付けた時、仲介に立ったのが夫の堀であったので、お秀は責任を感じていたのだ。しかし彼女は、兄が頭を下げるなら渡してもいい、と思っている。兄は兄で頭を下げてまで貰いたくない、と考えている。こうして兄妹が意地を張り合っている所へ登場したのがお延であった。お秀より一歳年下のお延だが、少しも負けてはいない。「良人に絶対に必要なものは、あたしがちゃんと拵へる丈」と、叔父の岡本から貰った小切手を出して対抗する。小切手が二枚並んだ。お秀の目に光るものがあつた。

「あなた方お二人は御自分達の事より外に何にも考へてゐらっしゃらない方だといふ事なんです。自分たちさえ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しようが、丸で余所を向いて取り合はずにゐられる方だといふ丈なんです」

「自分の事しか考へられないあなた方は、人間として他の親切に應ずる資格を失なつてゐらっしゃる」

お秀はそう言う。夫婦の自己主義に対するこの批判は、当然作者漱石が抱いている批判でもあろう。

口喧嘩の騒動の後、波紋は意外な方向に広がっていく。お秀から事情を聞いた吉川夫人が見舞いに来て、かつての津田の恋人清子に会いに行くことを勧める。離婚仕掛人のような役割を演ずる吉川夫人の意図は不明だが、津田は退院後、休暇と旅費を貰って、清子が滞在している温泉場に出掛けて行く。津田お延の夫婦がその後どうなっていくのか、自己主義者として罰を受けるのか、自分達の非を認めるのか、作者死亡による中断のため、結末は分らない。

「それから」の代助も『明暗』の津田も父からの仕送りで優雅に暮らしていたわけだが、漱石の作品には他にも『虞美人草』の甲野欽吾や『彼岸過迄』の須永、『こころ』の先生など、いわゆる金利生活者として働かずには生活している人物達が登場してくる。それなら現実の漱石の暮らしぶりはどうであつたかと言えば、それ程恵まれたもの

ではなく、資産もないし、毎日を齟齬と過していたのが実状である。それでは何故それだけ懸隔のある人物たちを描いたのか。それは漱石文学を理解する重要な鍵の一つなので、次章で触れる予定であるが、とにかく漱石の経済生活は煩悩に満ちたものであった。その苦渋の日常は彼の唯一の自伝的小説『道草』に率直に表現されている。「日常生活における金銭をめぐる問題」の表現を検討する上で最も重要な作品がこの『道草』である。冒頭に「健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に世帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだらう」と表現されているように、漱石がイギリス留学から帰国したばかりの、数え年三十六歳当時の日常生活が描かれている。

健三は学校の教師である。養父島田の代理でやって来た吉田虎吉に説明したところによると、月収は百一、三十円だが、消費した後に残るのは零である、となっている。ある日、細君が「何うにかして頂かないと……」と会計簿を持ってきて、自分の着物と帯を質に入れた話をする場面もある。健三はもう少し働く決心をして、新たに受け取った幾枚かの紙幣を封筒に入れたまま畳の上に放り出しておく。そういう切り詰めた生活を送っている健三だが、そこへ過去が追ってくるのである。過去というしがらみを背負って、兄姉、養父母、養父などの親類、縁者が彼に迫ってくるのである。「自分のやうなものが親類中で一番好くなつてゐると考へられるのは」情けなく、つらいと書かれているが、唯一突出している大学出、洋行帰りの健三に経済的援助を頼もうとし、幾らでもいいから金銭をせびり取ろうとする。「彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく感じた」「みんな金が欲しいのだ。さうして金より外には何にも欲しくないのだ」斯う考へて見ると、自分が今迄何をして来たのか解らなくなつた」と表現されている。

腹違いの姉がいる。「どんなに平易しい字も、とうとう頭へ這入らず仕舞に、五十の今日迄生きて来た」無筆で、喘息持ちのこの姉に、健三は月々幾らか小遣いを渡してきたが、久し振りに訪ねて行くと、それを少し増してくれと頼まれる。姉の夫比田は従兄で、昔から遊び好きだったが、今は勤め先の近くに女を囲つていて、月の半分は帰って来ないし、生活費も余り入れない。がさつてお喋りな姉を見て、「是が己の姉なんだからなあ」健三の胸にいつもそういう述懐が起るのである。

しかし、姉よりもっと強烈に健三を悩ませたのは、もう縁の切れている養父島田である。勤め先の学校へ向う途中で偶然この男と出会う場面から始まっているこの小説は、あわよくば再び縁を繋ぎ、老後の生活費を引き出そうともくろむ因業な島田との交渉、軋轢を主軸として展開しているのである。幼少の時に島田に養子に出された健三。実家の父にとつて彼は「小さな一個の邪魔物であった。何しに斯んな出来損ひが舞ひ込んで来たかといふ顔付をした父は、殆ど子としての待遇を彼に与へなかつた」「父の此態度が、生の父に対する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした」。健三の心の傷は深く、怨念がいつまでも残っていたのが分る。島田の家で暮らした過去も微細に描き込まれているが、やがて島田と娘お縫を連れたお藤という女性との間に關係が出来、養父母は離婚する。健三は実家と養家の間を往き来する羽目に陥つた。「両方から突き返されて、両方の間をまご／＼してゐた」「実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧ろ物品であつた」。結局、養育料の名目で手切れ金が父から島田に渡つて縁が切れたのは健三が三十二歳の時であつた。島田とは絶交だから、今後いっさい付き合ひをしてはならない、と父は言つた。

その島田がもと通りの交際を願えないかとちよくちよくやつて来るようになったのである。小遣いをやらないうちは帰らず、島田の姓に復帰して貰いたいから取り次いでくれ、と比田の家に頼みに行つたりした。健三は迫り返したりする。すると代理人がやつて来て、もう再びお宅へは伺わないと言っているから、離縁の際の書付を幾らかまとまつた金額で引き替えたらどうか、と申し出た。健三は、困るからどうかしてほしい、と言うなら、昔の情義上少しの工面はする、と答えて百円を渡すことにした。

島田と離別した後、再婚して波多野と名乗つてゐる養母お常も粗末な衣服をまとつてやつて来た。幼い健三に「健坊、御前本当は誰の子なの。隠さずにさう御云ひ」としつこく訊いたお常。「彼奴は簪だよ。御母さんにも御前にも簪だよ。骨を粉にしても仇討をしなくっちゃ」とお藤を罵つて齒をぎりぎり嚙んだお常。そのお常がすっかり老いて、白髪頭で丸まच्चく坐つてゐる。健三は五円紙幣を渡した。

自分の身内ばかりではない。羽振りのよかつた細君の父親も今は落ちぶれて、厳寒の中、オーバーも着ない尾羽

打ち枯らした姿で訪ねて来る。かつては西洋館に日本家屋も一棟ついた屋敷に五人の下女と二人の書生を置いて暮らしていた義父は、官吏の地位を失った後、相場に手を出して多くもない貯蓄をことごとく失ってしまったのである。細君はお古の二重回しを出してやった。義父の頼みは、銀行に借金を申し込んだら確かな証人をたてて貰いたい、健三ならいいと言っているの、判を押してほしい、というのである。もうどこへ頼んでも判を押してくれる人がいないので、仕方なく彼の所へ来たのだという明白な事情も推察できない健三だが、どんな目に合わされるかわからない、と怖れて、「印を捺す事は何うも危険ですから已めたいと思ひます。然し其代り私の手で出来る丈の金を調へて上げませう」と答えた。そして友人に頼んで四百円を借り、それを義父に渡した。健三はその借金を返すためにまた余分に働かなければならなかったし、背中合わせのまま暮らしてきた夫婦の間にまた微妙な影を落とすことにもなった。

『道草』は現実の時間をかなり圧縮して構成をたてている作品ではあるが、ほぼ忠実に作者の実生活が描かれているだけに、親類、縁者の人物像は、モデルたちが読後、たぶん不愉快になったであろうと推察される程ズケズケと容赦なく表現されている。積年の怨念が言葉の端々に滲み出ているし、漱石の本心が明瞭に読み取れる。健三が「お前は必竟何をしに世の中に生れて来たのだ」と自らに問う場面があるし、「己のは黙って成し崩しに自殺するのだ。気の毒だと云つて呉れるものは一人もありやしない」と考える場面もある。健三の暗鬱な思いが直接的に伝わってくる表現である。当然それは漱石その人の根底にある感情であり、彼の思想、文学はそれを基礎として構築されたのである。

### 3. 職業と仕事及び理想の生活像

『道草』の最後で健三は、「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない」と呟く。その「口調は吐き出す様に苦々しかった」と表現されている。人間は煩いや束縛に満ちた日常生活から逃れようがない。いかに嫌悪感を抱き、痛烈に批判をしようとも、現実の中で生きていかなければならない。生活を維持していかなければならないの

である。だとすれば、どう生きていったらよいのか、どんな職業を選択し、どんな生活を営んでいけばよいのか、次に問われることになる。漱石はその問題にも真正面から取り組んでいる。

『それから』の主人公代助は無職だが、月に一度、本家に金を貰いに行つて生計を立てている。実業家の父からは「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不体裁だな」と言われるのだが、本人は決してのらくらしているとは思っていない。「たゞ職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上等人種」だと考えている。「親爺おやぢの幼稚な頭脳には、かく有意義に月日を利用しつつある結果が、自己の思想情操の上に、結晶して吹き出してゐるのが、全く映らない」のだ、と考えている。しかし、嫂からは「貴方あなたは寝てゐて、御金を取らうとするから狡猾よ」と皮肉られてゐる。

その代助が友人の平岡と職業をめぐつて討論する場面がある。何故働かないのか、と平岡に訊かれ、「そりや僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本対西洋の關係が駄目だから働かないのだ」と日本社会の批判を展開して、「悉く暗黒だ。其間に立つて僕一人が、何と云つたつて、何を為たつて、仕様がないうさ」と言う。平岡は「此社会に用のない傍觀者にして始めて口にすべき事だ」「君は金に不自由しないから不可いけない。生活に困らないから、働らく氣にならないんだ」と反論する。二人の議論は發展して、

「つまり食ふ為めの職業は、誠実にや出来悪いと云ふ意味さ」

「僕の考へと丸で反対だね。食ふ為めだから、猛烈に働らく氣になるんだらう」

「猛烈には働らせるかも知れないが誠実には働らき悪いよ。食ふための働らきと云ふと、つまり食ふのと、働らくのとどつちが目的だと思ふ」

「無論食ふ方さ」

「夫れ見給へ。食ふ方が目的で働らく方が方便なら、食ひ易い様に、働き方を合せて行くのが当然だらう。さうすりや、何を働らいたつて、又どう働らいたつて、構はない、只麵麴めんこくが得られ、ば好いと云ふ事に帰着して仕舞ふぢやないか。労力の内容も方向も乃至順序も悉く他から掣肘される以上は、其労力は墮落の労力だ」

この対話は即ち漱石内部の理想論と現実論との対立でもある。食うために働くのは意味がない、それよりも内容豊かな時間を過すほうが望ましい。これは漱石の切実な願望であった。がしかし、実際には食うために働かなければならなかった。平岡の立場は漱石の現実でもあったわけである。漱石は理想と現実の矛盾、対立の中に身を横たえていたのである。

代助が主張する思想の根拠は、三千代との仲を深めようと気持を固める場面にはつきり示されている。「自己は何の為に此世の中に生れて来たか」を考えるのである。「自己」本来の活動を、自己本来の目的としてゐた。歩きたから歩く。すると歩くのが目的になる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり、考へたりするのは、歩行と思考の墮落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立て、活動するのは活動の墮落になる。従つて自己全体の活動を挙げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である」

自己「本位の思想を展開している部分である。この根源的な思想が發展して、自然であること、天の法則に従うことの重要性を認識するに至つて、八千代に恋愛感情を告白することになるのである。しかしその結果、本家と絶縁状態となつて、職を探しに出なければならなくなつた。食うためには、二人の生活を維持するためには働かなければならない。代助のこの矛盾は漱石その人の矛盾でもあつて、その中で自分の生活像を模索していかなければならなかつた。どう生きていったらよいのかを考えつづけなければならなかつた。理想の生活スタイルを求めて表現を積み重ねていかなければならなかつたのである。

漱石の全作品の中で彼が望んでいたであろうと思われる典型的な生活像が最も端的に描かれているのは『野分』である。作者の論理が余りにも生で出過ぎていたために、十分に小説としてこなれているとは言えず、成功作の部類には入らない作品であるが、漱石が抱いていた望ましい生活のイメージは直接的に伝わってくる。

『野分』は、「白井道也は文学者である」という一行で始まっている。作者と同じ文学者という明確な設定である。

分身と見てよいし、命名も「道」という思想を示している。彼は「八年前大学を卒業してから田舎の中学を二三箇所流して歩いた末、去年の春飄然と東京へ戻つて来た」。どの地方でも受け容れられなかったのである。初めに赴任したのは越後だが、ある時の演説会で「金力と品性」という題目のもとに両者の必ずしも一致しない理由を説明して、その町の有力企業である石油会社の「役員等の暴慢と、青年子弟の何等の定見もなくして徒らに黄白万能主義を信奉するの弊とを戒めた」ために、身の程知らずの馬鹿教師呼ばわりされ、その地を去った。黄白とは金銭のことである。次は九州、工業中心の町である。ここでは「金の力で生きて居りながら、金を誹るそとのは、生んで貰った親に悪体あくたいをつくと同じ事である。其金を作ってくれる実業家を軽んずるなら食はずに死んで見るがい」。死ねるか、死に切れずに降参をするか、試めして見様」というので放り出された。三番目は中国辺の田舎の中学で、ある時、旧藩主が参観に来た。教室に入つて来たその「所の神様」に挨拶をしなかったために頑愚と評され、嘲罵を背に東京へ戻つて来たのである。

「人格に於て流俗より高いと自信して居る」道也は、「学問の根底たる立脚地を離る、のを深く陋劣と心得、世に容れられようとする刹那に自分が奇麗に消滅してしまふ、と怖れていたのである。彼は「愛想をつかした社会状態を矯正するには筆の力によらねばならぬ」と悟つて、江湖雜誌の記者となる。インタビュ記事の取材に走り回つたり、自分の雑誌に憂世子なる筆名で「解脱と拘泥」という論文を記載したりしている。定収入は江湖雜誌の編集で二十円、英和事典の編纂で十五円、その他、新聞、雑誌に原稿を寄稿するが、それはたまに二円、三円の報酬があるくらいで余り金にはならない。当然、細君は不満である。「楽で御金の取れる口は断つて、忙しくつて、一文にもならない事許りなさんですもの、誰だつて酔興だと思ひますわ」などと云つて責める。道也は「食へさへすればいい、ぢやないか」と答え、あくまでも筆一本で生活するつもりだと言うのである。

彼はまた著述をし、四百三十五枚の原稿を書き終えた。南溟堂という出版社に持つて行つたところ、有名人の序文があれば引き受けるという返事であつた。そこで友人の大学教授に頼んでみたものの断られてしまふ。それでも「比物質的に何等の功能もない述作的労力の裡には彼の生命がある」のである。昔の教え子高柳君に向つて彼

は、文学者は独りぼっちでいい、と言う。「一人坊っちは崇高なものです」。名前なんてあてにならないものはどうでもいい。ただこう働かなくては満足できないから働くだけで、これがわたしの道なのだ。道に従うのが一番よい。そう語って聞かせるのである。

貧しくてもいいから筆一本で生活し、著述を世に問う、それが自分の道であると信じている白井道也。この人物の生き方、生活スタイルこそ作者漱石が望んでいた理想の生活像ではなかっただろうか。事実、漱石は社会的に評価の高い大学教授の職を捨てて、新聞社の社員ではあるが、筆一本の小説家に転身している。理想を実現したことになる。

この理想の背後には金銭に対する否定的、批判的感情が潜んでいる。それは小説の終わり近く、清輝館の演説会で道也が「現代の青年に告ぐ」という演題で講演をする、その内容に端的に表現されているのである。本人が「人を救ふための演説」だと自負しているこの講演の中で、彼は徹底的に金銭と、金銭を背負って権力を握っている人間達を攻撃している。「理想は魂である」と勤王の志士以上の覚悟で理想を貫くべしと説いた後、「学問をするもの、理想は何であらうとも——金でない事実は慥かである」と強調して、

「一般の世人は努力と金の関係に就て大なる誤謬を有してゐる。彼等は相応の学問をすれば相応の金がとれる見込のあるものだと思ふ。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる器械である。金がほしければ金を目的にする実業家とか商売人になるが、い。」

「金のある所には理窟があると考へてゐるのは愚の極である。しかも世間はさう誤認してゐる。」

「かの金持ち共は己惚れて、自分達は社会の上流に位して一般から尊敬されてゐるからして、世の中に自分程理窟に通じたものはない。学者だらうが、何だらうが己に頭をさげねばならんと思ふのは憫然の次第で、」

「金があるから人間が高尚だとは云へない。金を目安にして人物の価値をさめる訳には行かない。」

「金があるからと云ふて無暗にえらがるのは間違つてゐる。」

講演の中に顔を覗かせているこれらの金銭観は儒教、仏教、武士道などによって培われた江戸時代以来の倫理観

に根ざしたものに違いない。が、それにしても何故これ程までに感情的な発言を繰り返すのか。精神の優位性を主張しなければならなかったのか。世間の風潮に対する憤怒がはじけたと言うことも出来るが、一つには明治の新時代を担う知識人としての責任感、使命感がかなり強く働いていたからではないだろうか。そのため、人々を救済するなどという表現になったり、「道」という概念の提示になったりしたのであろう。「野分」を書いた頃の漱石には啓蒙思想的な側面が顕著であつたと言える。

白井道也の系列に属する登場人物は他にも何人かいる。「彼岸過迄」の松本もそのひとりである。文筆業であるこの男は高等遊民を自称していて、貧しいけれども自由に暮らしている。子供も多く、十三になる女を頭に、男、女、男と互い違いに順序よく四人、まことに賑やかである。姉の夫である実業家の田口を「あ、忙しくしちゃ」「いくら他（ひと）の感情を害したって、困りやしないと云ふ余裕がない」と批判している。訪ねてきた語り手の敬太郎に、高等遊民は家庭的なのだと言ったりする。甥の須永や姪の千代子から慕われていて、二人は彼に心を開いて何でも打ち明ける。松本はそういう男である。漱石その人に似ている。

『明暗』の藤井もまた、白井や松本と同様の生活スタイルを保持している。津田と秀子は、父の弟であるこの藤井の家で育ったので、親子のような関係にある。特に秀子は精神的にもこの叔父の影響を強く受けている。藤井はいまだかつて月給というものを貰ったことがなく、始終貧乏しており、市の西北にあたる高台の片隅、いわゆる場末で生活している。彼は雑誌の編集や文筆など、活字で飯を食っているが、実業家である友人の岡本は、傍観者の態度を崩さない彼を隱居主義だと批判する。藤井は一種の人生批評家、鋭利な観察者とも言える。しかし、津田はこう見ている。「始終机に向かつて沈黙の間に活字的の気炎を天下に散布してゐる叔父は、実際の世間に於て決して筆程の有力者ではなかった。彼は暗に其距離を自覚してゐた。其自覚は又彼を多少頑固（かたくな）にした。幾分か排外的にもした。金力権力本位の社会に出て、他（ひと）から馬鹿にされるのを恐れる彼の一面には、其金力権力のために、自己の本領を一分でも冒されては大変だと云ふ警戒の念が絶えず何処かに働いてゐるらしく見えた」

自由人藤井の負の部分を津田は認識していたわけだが、この藤井の影のような存在で、その負の要素を代弁しているのが津田の大学時代の旧友小林である。彼は藤井を先生と呼び、雑誌の編集、校正、原稿の持ち回りなどの手伝いをしていたのだが、今度、朝鮮の新聞社に就職が決って日本を去ることになっていた。小林は津田や妻のお延にからむ。お延には、彼が無籍者のような顔をして世の中をうろろろしている男に見え、軽蔑と同時にある程度の無気味さを感じていた。小林はお延に「僻<sup>ひが</sup>んでるかも知れません」「僕は人に厭<sup>いと</sup>がられるために生きてるんです」などと言ったりする。

最後に津田は餞別として十円紙幣を三枚渡す。その別れの席での小林のからみ方は激しく、ほとんど喧嘩を売っているのに等しく、「君の軽蔑に対する僕の復讐」などという言葉をはき吐く。この怨念の深さは一体、どこから来るのだろうか。学問や芸術に対する世間の見方に反撥しているだけにはとどまらない、一種の憎悪すら感じさせる。小林は三枚の十円紙幣の中から一枚を画家の原にやることで津田に面当てをする。原は売れない画家である。小林は金銭万能主義の社会に面当てをしているのであろうか。

他にも「それから」の中で寺尾という代助の友人が少しだけだが登場する。翻訳で生計を立てている男で、「食へないから仕方がない」と、二週間で片づけなくてはならない飯とじの書物を持って相談に来る。漱石は代助と対比するためにこの人物を登場させたのであろうが、主要な筋とはまったく関係のない寺尾を敢て出したところに漱石の執念が感じられる。貧しくても文筆で暮らしていく生き方に対する執着が感じられる場面だが、しかし、その内実はそれ程単純ではないのである。小林の人格的歪みがその複雑さをよく表わしている。

# 注

原文の引用は一九九三年十二月―一九九六年二月発行『漱石全集』（岩波書店）による。

- (一) 荒正人は『漱石文学全集別巻』（岩波書店）の年譜で「明治十四年か十五年に直克は先祖からの家屋を売却し、牛込区肴町（現新宿区肴町）五十四番地に住むことになった」と記載しているが、『漱石研究年表』（集英社）では明治十三年の項（二〇）に、火災にあって類焼したと思われる、とあって、「罹災後すぐかどうか不明だが牛込区肴町五十四番地の借

家に住むことになった」と書いている。しかし、武田勝彦『漱石の東京』（早稲田大学出版部）によれば「これが事実であるかどうかは断定できない」としながらも「一時的にしても、夏目家が肴町に移住したことは間違いはあるまい」（p. 227～228）と記している。

（2） 権利書や実印を渡した、とは書いていないが、それがなければ土地・家屋敷は売却できないであろう。明治時代の末、法律がそこまで整備されていなかったとは考えにくい。財産をめぐるトラブルの事実経過については漱石の記述は厳密ではない。全体に曖昧である。体験がないことの証明になるかも知れない。